

第297回くらしの植物苑観察会 令和5年12月16日(土)

「サザンカを用いたツバキ属の種間雑種」

箱田 直紀 恵泉女学園大学名誉教授／日本ツバキ協会会長

サザンカの園芸化にはヤブツバキなど他種との雑種が関与した

サザンカは沖縄から九州や四国西南部。本州では山口県萩市だけに自生するが、自生種は白花である(図1)。しかし、庭や生垣などに植えられている園芸サザンカは白だけでなく、桃色、紅色、紅覆輪花も多く、また一重、八重、千重、獅子咲きなど花形も多彩である。

これらサザンカの園芸化は、江戸時代初期あるいはそれより少し以前に、自生のサザンカとヤブツバキが自然交雑し、その雑種がさらにサザンカやヤブツバキと交雑を繰り返すことによって拡大したと考えられており、両者の中間的な雑種グループはハルサザンカやシンガシラ(カンツバキ)系と呼ばれ(図2. 3. 4)、園芸品種発達の中心的役割を果たしてきた。自生地に較べて栽培地域が広いことや開花期が長いことも、より耐寒性に優る春咲きヤブツバキの遺伝子が関与したためと考えられている。

それ以外にも、園芸サザンカの中には、チャの遺伝子が関与したものや、中国原産のユチャやその雑種(図5)も含まれることなどから、園芸植物としてのサザンカとは、自生種としてのサザンカに加えて、ヤブツバキ、チャ、ユチャ、など多彩な遺伝子が関与した種間雑種の総称として用いられるようになったらしい。



図1 自生サザンカの花
(山口県萩市産)

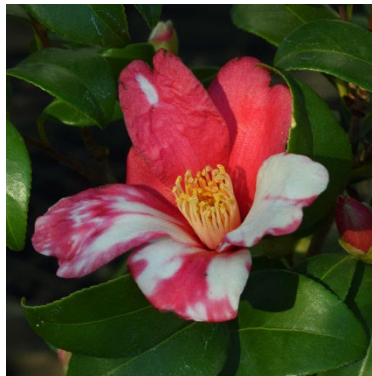


図2 ハルサザンカ・鎌倉紋
(1700年代)

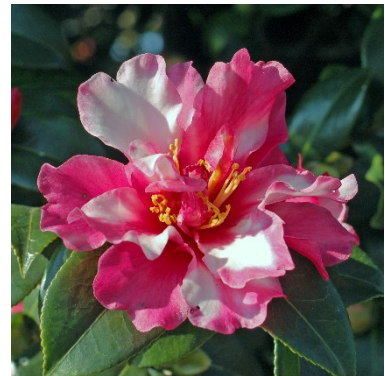


図3 ハルサザンカ・星飛竜
(1847年)



図4 シンガシラ(カンツバキ)系・獅子頭 (1894年)



図5 田毎の月
(中国産ユチャ系 1930年)



図6 ドリーム・ガール
(サザンカ×トウツバキ 1965年)

サザンカを用いた人為的な交雑育種の始まり

人為的な交配によるツバキ属の雑種作りは、1940年に英国で始まったが、サザンカを用いた交配は、華やかなトウツバキの耐寒性を高めることと、サザンカの秋～冬咲きの遺伝子の導入を目的として1960年代から米国を中心に盛んとなり、多くの華やかな雑種(図6)が販売された。華やかな大輪品種が多かったため世界各地で栽培されるようになった。

日本におけるサザンカの交雑育種と新花

日本でのサザンカを用いた交雑育種は1970年代からで、埼玉県茶業試験場の淵之上氏によるサザンカとチャの雑種が最初である。サザンチャの名で新聞等に紹介され、一時はかなり注目されたが、園芸植物としては全く利用されなかった。

園芸化を目的としたサザンカの雑種作りは1980年代から本格化した。中国やベトナムなどから多くの原種が導入されるようになってからであるが、新潟大学の萩屋教授や大阪府の吉川和男氏をはじめ、熱心な育種家によりサザンカやその近縁種を用いた種間雑種が次々と紹介されるようになった(図7, 8, 9)。また、これらの種間雑種作りを通じて、ツバキの育種はサザンカやヤブツバキというような個々の種内だけではなく、ツバキ属全体の中で花色や花形変異、あるいは耐寒性の付与などが求められるように変化してきた。

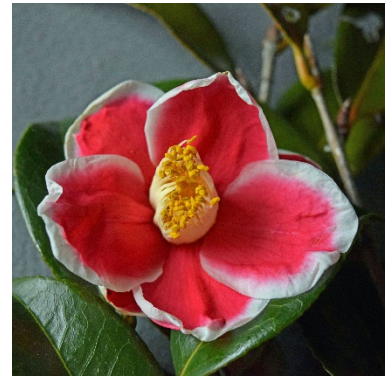
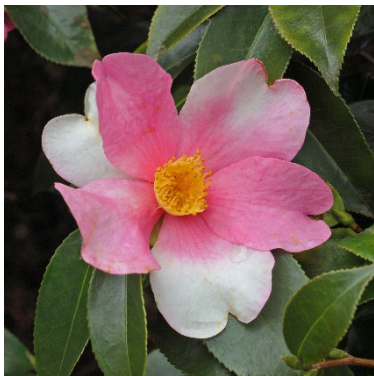


図7 夢
(獅子頭×攸県油茶)
(1981年 萩屋薫)

図8 ピンク・ダイヤモンド
(サザンカ×グランサム×トウツバキ)
(2009年 吉川和男)

図9 裕光
(ハルサザンカ・笑顔の実生)
(2021年 田邊幾之介)

サザンカに関する近年の世界的動向

最近十数年のことであるが、中国や英国、ドイツ、イタリアなどにおいてもサザンカ品種の収集やそれらを用いた雑種作りが盛んとなってきた。その背景には、海外では園芸ツバキの中でもサザンカの入手が難しかったこともあるが、外国人が好む八重や獅子咲きなどの華やかな重弁サザンカが増えてきたことに加え、秋や冬に咲くツバキとしての評価が高まってきたためと思われる。

.....

次回予告 第298回くらしの植物苑観察会 令和6年1月27日(土)

「くらしの中に息づく植物—衣類にまつわる植物—」

天野 誠 氏 (千葉県立中央博物館 上席研究員)

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要